

2021年5月24日(月)

老球の細道611号

シューターへの道

会津バスケットボール協会 室井 富仁

元バスケットボール男子日本代表で1972年ミュンヘン五輪得点王に輝いた谷口正朋氏が5月3日に75歳で亡くなった。私たちの世代のバスケットボール経験者は誰もが知っているシューティングマシーンであった。ミュンヘン五輪ではサウスポーのシューターとして9試合に出場して191点と活躍した。日本リーグの日本鋼管では1971年度から5季連続得点王で得点王(その前は会津坂下出身の江川嘉孝氏が得点王)。引退後は日本バスケットボール協会専務理事などを歴任した。〈付記:10数年前、坂下ミニバスコーチの二瓶誠二氏の主催したクリニックで喜多方市にも来訪してシュート指導をしている〉

谷口氏の凄いところは高校時代(中央大学付属杉並高校)からバスケットボールを初めて、3年時にはすでに全日本メンバーに選出されていたことである。186cmの当時では長身選手であったが、サイドラインぎりぎりからのロングジャンプシュートは正確無比であったことを今でも記憶している。私の高校時代、月刊誌に谷口氏が高校時代1日千本位毎日シュート練習していたことを読み大いに影響を受けた。

バスケットボールで最も重要なファundamentalはシュートである。特にワンハンドのセットシュート(フリースロー)は基本中の基本である。このシュートが入るか入らないかはフォームで決まる。きれいなフォームで打つことである。

きれいなシュートフォームを確立し、シュートの確率を向上させ、ゲームにおいてはシューターとしてコンスタントに得点し、いざというときにここ1本を任せられるシューターを育成する目的で、今年度も「坂下シュートクリニック」を二瓶誠二氏、鈴木新氏のご尽力により開催していただいた。今年度で7年目になる。

先日、5月のシュートクリニック「ワンハンドセットシュート」を終えた。若松市内から参加してくれた佐藤公希氏から「シュートフォームも健康診断と同じで1年に1回チェックしないとだめですね。今回参加して有意義でした」という言葉をいただいた。確かに選手のシュートフォームは放任していると、いつの間にか悪い癖がついていることがある。正しい理屈を知りながら反復練習をすることがシュート上達には絶対欠かせない。

ところで、わが会津若松市では65歳以上のコロナワクチン予約申し込みが始まって2週間が経過した。にもかかわらず、私は毎日電話しているのにいまだに電話がつながらず予約ができないでいる。毎日何時間、何百回かけてもつながらないという話を聞くと、私は1日数回で電話がつながらないとあきらめて翌日にまわしてしまっていた。

コロナワクチンの予約はシューターへの道と同じ原則であることを忘れていた。何回も何時間もくり返し繰り返しやるべきだった。アメリカNBAコーチ曰く「グッド(Good)シューターとグレート(Great)シューターの違いは費やす時間の差である」。シューター(コロナワクチン予約)への道限りなく遠い、今日の限りの時間をかけることで近づく。